

# 大会

禪竹作

季は	地は	ツレ	ワキ	シテ	後	シテ	ワキ	前
雜	山城	帝釈天	前に同じ	天狗		山伏	僧正	

「それ一代の教法は。五時八教をけづり。教内教外を分たれたり。五時と云つぱ。華嚴阿含方等般若法華。四教とは是れ藏通別円たり。遮那教主の秘藏を受け。五想成身の峰を開きしより以来。たれか仏法を崇敬せざらん。げに有難き御法とかや。

地  
「鷺の御山をうつすなる。く。一仏乗の嶺には。真如の恵日まとかなり。鳥三宝を念じて。風常樂と音づるゝ。げにたぐひなき深山かな。く。

シテサシ  
「月は古殿の灯をかゝげ。風は空廊の簾となつて。石上に塵なく滑らかなる。苔路をあゆみよるべの水。あら心すごの山洞やな。

詞  
「いかに此庵室の内へ案内申し候。

ワキ詞  
「我ぜんかんの窓に向ひ心を澄ます処に。案内申さ

んとは如何なるものぞ。

シテ詞  
「是は此あたりに住居する客僧にて候。我既に身ま

かるべきを。御憐みにより命たすかり申すこと。

かへすぐも有がたう候。此事申さん為に是まるりて候。

ワキ  
「是はおもひもよらぬ事を承り候ふ物かな。命をたすけ申すとは更に思ひもよらず候。」

シテ  
「都東北院のあたりにての御事なり。定めて思し召し合はすべし。かばかりの御こゝろざし。などかは申し上げざらん。此報恩に何事にてもあれ。御望みの事候はゞ。刹那に叶へ申すべし。」

ワキ  
「げにさる事のありしなり。又望みを叶へ給はん事。此世の望み更になし。たゞし釈尊靈鷲山にての御説法のあります。まのあたりに拝み申したくこそ候へ。」

シテ  
「それこそ易き御望みなれ。まこと左様に思しめば。すなはち拝ませ申すべし。さりながら。貴しと思しめすならば。かららず我為めあしかるべし。かまひて疑ひ給ふなど。」

地

シテ

「かへすぐ」も約諾し。く。さあらばあれに見え

たる。杉一村に立ちよりて。目をふさぎ待ち給へ。

仏の御声のきこえなば。其時両眼をひらきて。よ

くく御覧候へと。いふかとみれば雲霧。ふりく

る雨の足音。ほろくとあゆみ行く道の。木の葉

をさつと吹きあげて。梢にあがり谷にくだり。か

き消すやうに失せにけり。く。  
(中入)

後ジテ

「それ山はちひさき土くれを生ず。かるがゆゑに高

き事をなし。海は細き流れをいとはず。故に深き  
事をなす。

地「ふしきや虚空に音楽ひゞき。く。仏の御声あら  
たに聞ゆ。両眼をひらきあたりを見れば。

シテ「山はすなはち靈山となり。

地「大地は金瑠璃。

シテ「木は又七重宝樹となつて。

地「釈迦如来獅子の座に。あらはれ給へば。普賢文珠

左右に居給へり。菩薩聖衆雲霞の如し。砂の上に

は龍神八部。おの／＼挾し囲繞せり。

シテ  
「加葉阿難の大聲聞。」

地 「加葉阿難の大聲聞は。一面に坐せり。空より四種の花ふりくだり。天人雲に。つらなり微妙の音樂を奏す。如來肝心の法文を説き給ふ。實にありがたきけしきかな。」

ワキ 「僧正其時たちまちに。」

地 「僧正其時たちまちに。信心を發し。隨喜の涙眼に浮び。一心に合掌し。帰命頂礼大恩教主。釈迦如來と。恭敬礼拝するほどに。俄に台嶺ひゞき震動し。帝釈天よりくだり給ふを。見るより天狗おの／＼さわぎ。恐れをなしける不思議さよ。」

地 「刹那が間に喜見城の。／＼。帝釈あらはれ数千の魔術を。あさまになせば。有りつる大会。ちりぐになつてぞ見えたりける。」

「帝釈此時いかり給ひ。

地「帝釈此時いかり給ひ。かばかりの信者をなど驚かすと。たちまちさんぐに苦を見せ給へば。羽風をたてゝ翔らんとすれども。もぢり羽になつて飛行も叶はねば。おそれ奉り押し申せば。帝釈すなはち雲路をさして。あがらせ給ふ。其時天狗は岩根をつたひ。くだるとぞ見えし。いはねをつたひ下ると見えて。深谷の岩洞に入りにけり。